
晩夏の風

柿原 凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

晩夏の風

【Nコード】

N6926S

【作者名】

柿原 凜

【あらすじ】

第四回では、短歌を題材に描写。

Quote..

秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

口語訳..秋が来たと、目にははっきりとは見えないが、（秋めいてきた）風の音に驚いたものだなあ。

乾いた黒土に、輪郭からはみ出るように湧いて出る汗がこぼれ落ちて染み込んでいく。それにかまうことなく足元の溝をさらに深く掘り、血豆だらけの両手でしっかり握ったバットを耳元にかまえる。頭の中の相手投手をいつもより近めに設定し、放られた透明の硬球に向かって練習用の重たいバットを押し出すと、低い音を立ててほぼ水平に空を切った。

今日、先輩たちの夏が終わった。来年からはとうとう俺らが主役。明日の練習からは俺が主将を任されることになったのだが、正直不安で仕方がない。いつも先輩に引っ張られてばかりで、率先して指示を出すようなタイプではない。先輩達からチーム一の練習量をほめてもらっての主将就任だったが、それは俺が人一倍野球が下手だからだ。誰よりも練習していないと同級生に追いつけないのだ。だから俺はとにかく練習に練習を重ねてきた。

俺以外に誰一人として居ないこのグラウンドで、もう何時間素振りをし続け、その間何度の真空状態を作り上げてきたのかも分からない。夏の空は、入道雲が引っ張ってきたのだろうかいつの間にか濃い橙色に変わっていた。細長く伸びた自分の影に向かって、一滴また一滴と大玉の汗が落ちていく。頬を伝う汗の筋がもう一滴落とそうとした瞬間、センターの奥の古い得点板の方から勢いよく風が吹いてきた。それはまるで今後の俺らを示唆するような向かい風。得点板の上の方にある校旗が、なびくというより強い風に叩かれている。

一瞬の出来事に、ワテンポの間が空く。強い風の塊の後にやってきた弱い風に拍子抜けし、全身の力が抜けた。バットの先を蒸れた黒土に置き、腹で柄の部分を支える。腰に手を当て状態を仰け反らせると、顔面にたまった汗を拭っていく涼風が心地よい。

ひと呼吸置き、またバットをかまえると、握りこぶしの内側で血

豆が疼いた。とにかく限界の限界まで、不安という向かい風をこのバットで切り裂いていく。何よりチームの追い風となるために。頬を伝う汗の筋を、また涼風が拭っていった。

(後書き)

実はいつかの俺の姿だったり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6926s/>

晩夏の風

2011年10月6日00時08分発行